

問題解決学習における知識の主体的組織

——初期社会科教育実践における児童の単元学習の日記の分析を通して——

木村博一

一、本稿の目的

初期社会科教育実践は、経験主義の教育論にもとづく問題解決学習を行うところに大きな特色をもつといえよう。『小学校学習指導要領社会科編（試案）』は、「実生活の中で直面する切実な問題を取りあげて、それを自主的に究明していくことを学習の方法とすることが望ましい」と述べている。子どもが問題意識をもって主体的に「環境」に働きかけながら思考し、自己の「経験の絶え間ない改造」を行う学習をするところに初期社会科の本質があったと考えられる。

ところで、子どもは思考することによって一定の考えを形成する。すなわち、自己の経験を組織だてたものとしての知識の組織を形成する。これは「知識の主体的組織」と呼ばれる。問題解決学習は経験の絶えざる再構成を行う学習であ

る。したがって、「知識の主体的組織」は不断に更新される。問題解決学習は「知識の主体的組織」の連続的改造を行う学習と考えられるのである。

そこで、本稿の目的は、問題解決学習において子どもが形成する「知識の主体的組織」の特質を、経験主義の知識学習論との関連において明らかにすることにある。本稿では、昭和二六年に和歌山市の吹上小学校で実践された単元「鉄と日本」（第六学年）の学習日記を分析する中で、その目的を達成したい。

二、単元「鉄と日本」の学習日記

和歌山市の吹上小学校は、極めて意欲的に初期社会科教育実践に取り組んだ学校として、全国的に評価を受けたといわれている学校である。吹上小は、研究テーマを次のように変

化させながら実践研究を積み重ねている。

(1) コア・カリキュラムの編成(昭和二二～二四年)

(2) 社会科をコアとする実践(昭和二五年)

(3) 日本の歴史的社会的課題に立脚した実践(昭和二六～二七年)

(4) 基礎的客観的知識を導入した社会科の実践(昭和三〇年)

本稿で取り上げる單元「鉄と日本」の実践は、この時期区分では(3)にあたる昭和二六年一月一日から二月一八日にかけて行われている。指導者は同校の雑賀明先生である。また、單元学習日記は城野精二君が書いたものである。城野君はこの日記に、本単元で学習したことや考えたことを毎日毎日詳しく記録しており、日記は原稿用紙一五〇枚に及んでいる。初期社会科の問題解決学習が実際にどのように実践されていたのかを明らかにするとともに、問題解決学習の中で子どもがどのように思考活動を繰り返し、どのような「知識の主體的組織」を形成していったのか、子ども達の探究的思考活動と関連して教師はどのような学習指導活動を行ったのかを分析する手がかりとして極めて貴重な資料であると考えられる。

それでは以下に單元「鉄と日本」の城野精二君の学習日記を抄録する。(114は11月1日の意味である)

114 僕たちはこれからの單元で鉄について生活学習をす

ることになった。近頃、鉄や金物類の値段が上がってきたし、古鉄屋さんが多くなってきたのは、朝鮮の戦争に関係があるのだろうか。それとも日本に段々鉄が減ってきたからだろうか。古鉄屋さんが多くなったのは、鉄の値段が上がったので古鉄を買うともうけになるからだろうか。この頃の新聞には、どこかで鉄が盗まれたというニュースが毎日のついているけれども、今は古鉄を買いに来てもないので盗むようになったのだろうか。みんなで想像しながら話し合った。

115 今日、單元の問題をみんなで決めた。「なぜ鉄の値段が高くなったのか、なぜ古鉄集めが盛んなのか」を学習することになった。それから、問題を解決するために各班で調べることも次のように決めた。

(1) 古鉄はどこへ行くのか。古鉄で何を作るのか。

(2) 鉄はどのようにして作るのか。

(3) 鉄の生産費はどうなっているのか。

(4) 日本に今、鉄の原料が多いのか少ないのか。

(5) 鉄の値段はどのように変化してきたのか。

このようなことがわかると、この單元の問題は解決できると、先生が言われた。

116 班分けをした。僕は、日本に今、鉄の原料が多いのか少ないのか調べる班に入った。

117 班で調べることを先生と相談して次のように決め

た。

①日本の鉄鉱石の産地と取れ高

②日本で使ってしまう鉄の量

③どの国からどれだけの鉄を輸入しているのか

④日本の製鉄原料の生産高の移りかわり

⑤外国とわが国の製鉄原料の生産高の比較

⑥日本の鉄鉱石の生産高は世界の何%ぐらいか

みんなで教科書や図書室の本や年鑑で調べようと話し合った。

11/9 日本の鉄鉱石の産地を地図帳で調べた。岩手の釜石、埼玉の秩父などが見つかった。

取れ高と欲しい量がわかれば足りない量がわかる、足りない量は輸入している量であると先生が教えてくれた。

11/12 先生が、日本の鉄鉱石の取れ高と輸入高、くず鉄の輸入高の移りかわりを教えてくれたので、ノートに調べて表を作った。取れ高も輸入高も段々減ってきている。戦争中にたくさん鉄が必要で方々の国から輸入していたけれども、戦争が終わってからは鉄がいらなくなつて輸入が段々と減ってきたのだらう。戦争なんかやめて鉄は平和のために使っていかなければならぬ。そうしたら人々は楽に生活できると思つた。次に、世界の国々の鉄鉱石の取れ高と含有量の表を作つ

た。土地の性質によって含有量がちがうというのはおもしろいと思つた。

11/13 今日、先生が「みんなはあまり先生を使わないね。先生はみんなの先生だから何でもわからないことは聞きなさい。先生でなければうまくいかないことがあれば、先生を使いなさい」と言われた。

11/14 先生が鉄鉱石の生産高と輸入高などを刷つたプリントを配った。それからいろいろなことがわかった。日本の鉄鉱石の生産は昭和一〇年から一四年まで少しずつ増えている。一五年から二〇年まで急に増えて、それから急に減つて、また少しずつ増えてきている。なぜ一五年頃から生産が多くなつたのか。アメリカとの戦争の準備を始めたからだらうと思つた。一五年頃からは鉄がほとんど戦争に使われていたのだと思つた。日本の鉄鉱石の輸入は昭和一〇年から一三年頃までは同じくらいだ。一四年から一七年までたいへん輸入が多い。戦争中はあまり輸入していない。二一年から二二年は少しも輸入していない。二三年からまた輸入し始めていくけれども少ない。日本にお金がないのでたくさん輸入できないのだと思つた。古鉄は昭和一〇年から一五年まで輸入が多いけれど、日本の生産はほとんどない。一六年から輸入が少なくなつて、日本の生産が多くなつていく。そして、今一番輸入が多くなつ

ている。日本の鉄鉱石の埋蔵量は九九五〇万トンで、砂鉄は七一三〇万トン、合計一億七〇八〇万トンだ。

鉄鉱石を一年に一〇〇万トンずつ掘ると、九九年で掘りつくされてしまう。たいへん心細いことだと思った。

1115 今までに作った円グラフを見ると、昭和二五年の鉄鉱石の輸入高は六三％で、取れ高は三七％である。輸入がたいへん多く、日本で取れる量が少ない。古鉄でも同じようだ。今までの調べで、日本には鉄が少なくということがわかってきた。だから、古鉄を集めて使っていかなければならないので、古鉄屋が多くなったのだと思った。まだわからないのは鉄の値段が高くなった理由だ。今、鉄の値段はどの国でも上がっているのだと先生が言われた。今、世界が二つに分かれようとしている。それで鉄で何かを作ろうとしていて、どの国でも鉄を買い集めていて売らないので、鉄の値段が上がっているのだと先生が言った。

1116 今日班の中でどれだけ調べられたかについて話し合った。初めに、先生が「君たちの調べからどんなことがわかってきたらいいのか」とたずねた。僕たちは「古鉄屋さんが多くなったのと、鉄の値段が高くなったのはなぜか、ということがわかればよいです」と答えた。「そこで君たちの班はどんなことを調べているのか」と先生が言った。僕は「日本の鉄鉱石の場所

と取れ高、日本で使ってしまう鉄の量、日本の鉄鉱石の輸入量を調べています」と答えた。先生はどのように発表していったらいいのかと言われた。班のみんなが調べたことをみんなが発表しようと言った。班のみんなが発表のためのグラフを模造紙に書いた。

1117 今日、発表のけいこをしていて疑問になってきたことがあった。日本で鉄鉱石が取れなくなるとどうするか。使う量の全部を輸入していくのだろうか。そうすると、日本はお金が減っていくばかりだろう。古鉄は全部鉄になるのだろうか。古鉄が全部鉄になるのなら鉄鉱石より得になる。得になるのなら古鉄屋が多くなった理由がわかると思った。

1119 鉄の値段が上がった理由は朝鮮の戦争に関係があるのではないかとみんなが話し合った。今、日本で朝鮮の戦争で使うものを作っているということだ。本当だとしたら、なぜ日本で戦争に使うものを作るのだろうか。アメリカは運賃が安いという理由で日本に作らせているそうだ。日本の鉄を使って作っているのか、アメリカから運んで来て作っているのか、はっきりしない。日本に鉄を作る原料を送るから作ったものを売ってくれとアメリカから頼まれているのだと後でわかった。

鉄は文明生活になくってはならないもので、鉄をどれ

だけ生産し、どれだけ使うかによって、その国の文化の程度がわかると、先生が言われた。鉄はどの国にとってもたいへん大切なものだと話し合った。

11/20 今日各班の調べたことの報告会をした。最初に、

「古鉄はどこへ行くのか、古鉄で何を作るのか」を調べた班が報告した。和歌山市で集められた古鉄は、古鉄屋から問屋を通じて八幡製鉄や新扶桑金属へ送られるそうだ。鉄鉱石に鋳物の古鉄とコークスと石灰石を混ぜると銑鉄ができる。銑鉄に再び古鉄を混ぜると鋼ができて、レールや鉄筋や鉄板や鉄管や時計のぜんまいなどが作られるということだ。古鉄は本当に大切なものだとわかった。古鉄屋が多くなつたのは、古鉄が大切なものだからだと思った。

戦争が終わって、日本の国が復興するために鉄が必要になつてきた。今と昭和一九年の戦争の真最中との鉄を使う量は同じくらいだということだ。けれども、必要なだけの原料がないし、輸入するにも日本にお金がないので、古鉄を集めているのだとわかった。鉄の原料が少ないので値段が上がって、もうけになるので古鉄屋が増えてきているのだと思った。

次に、「鉄の生産費」を調べた班が報告した。鉄の値段は生産費と利益で決まる。生産費は、鉄鉱石などの材料費と機械などの間接材料費と労務費と償却費と

電気代などの運転費と管理費などである。鉄の値段が高くなつたのは、船賃などの材料費と労務費と運転費が高くなつたからだということだ。それから、日本の製鉄の機械は旧式で、生産費が高くつくということだ。たとえば、アメリカには三千トンの釜があるのに、日本には千トンの釜しかない。鉄の値段を安くして外国に買ってもらうためには、大きな機械を使って三日でやることを一日でしたり、もうけを少なくして安くしなければならぬと話した。

11/21 今日僕たちの班が、「日本に今、鉄の原料が多いのか少ないのか」を発表した。今までの発表で、日本に必要なだけの鉄の原料がないので、古鉄を集めているし、鉄の値段が上がっているのだとわかってきた。

それで、日本の鉄鉱石の取れ高と輸入高と古鉄の輸入高と国内で集められている古鉄の量をわかってもらえばよいと思つて調べたことを発表した。発表しながら、鉄の値段が高くなつたのは、古鉄の量は決まっているのに、たくさん古鉄が集められ、その量が減つてきたからだと考えた。それから、日本の鉄を使用する量がこれからも多いと、鉄の値段がどんどん高くなつていくと思つた。

11/22 今日、「なぜ古鉄集めが多くなつたのか、なぜ鉄の値段が高くなつたのか」について、みんながわかつた

ことを話し合つて次のようにまとめた。

- (1) 日本に鉄の原料が少くない。
- (2) 鉄の原料の輸入が難しい。
- (3) 復興のため日本で鉄が必要である。
- (4) 日本に鉄の生産費が他の国よりも高い。
- (5) 国際的にも鉄の値段が上がっている。

(6) 世界の国々が軍備のために鉄を買い集めている。

先生が物の値段の決まり方を教えてくれた。生産が少なくて買い手が多いと値段が上がる。反対に生産が多くて買い手が少ないと値段が下がる。それに、生産費が高くつくと値段が上がるといふことだ。物の値段が上がつたり下がつたりする理由がわかつた。今までの学習で、日本では鉄の原料が少くないし、輸入も難しいのに、鉄をたくさん復興のために使つて鉄が不足するから、鉄の値段が高くなつていふのだと考へた。それから、古鉄屋は鉄の値段が上がつていふもうかるので多くなつたのだと考へた。それから、鉄の原料をこれからも外国から買つと、段々と鉄の値段が上がつてくると思つた。

11/26

今日、次の学習問題を話し合つて決めた。僕は、今の製鉄業はどうなつていふのか、これからの日本の製鉄業はどうなつていふのか、鉄の原料の輸入はこれから先どうしていふのか、を調べたいと思つていた。そ

れで最初に意見を言つた。輸入をどうするのかは、貿易を勉強すればよいという意見が出た。それから、扶桑金属工場を見学しようという意見が出た。みんなが賛成した。僕も賛成だつた。何のために見学するのかと先生がたずねた。学習したことを確かめたい、鉄はどのように作られていふのかを見たい、という意見が出た。結局、扶桑金属工場を見学することに決まつた。

11/27

今日は工業の発達について勉強した。工業は、一人で作る→家内で作る→工場制手工業→近代工業のように変わつてきた。段々と分業で物を作るようになってきたことがわかつた。

11/28

きのうの勉強のつづきをした。近代工業になつたのはワットが蒸気機関を發明して、大量生産ができるようになったからだとわかつた。工場見学に行つたら、大量生産がどのように行われていふのかを見てこようと話し合つた。

11/29

工場見学に行つてどんなことを調べてくるのかを話し合つた。「今までの学習を確かめたい」「鉄はどのように作られていふのかを見たい」「大量生産はどのように行われていふのかを調べたい」といふても何を調べるのか、と先生がたずねた。そこで、みんなで相談して次のようなことを調べることになつた。

(1) 一日の生産量はどれくらいか。一人当りの生産量は

どれくらいか。

(2)原料の割合はどれくらいか。

(3)原料はどこから、どのようにして入手するのか。何で運んで来るのか。

(4)製品になるまでどのような機械を通るのか。流れ作業になっているのか。

(5)どのような動力を使っているのか。どれだけの電力や燃料を使うのか。

(6)鉄は何度でとけるのか。何を燃やして高い温度を出すのか。

(7)釜は何でできているのか。一度にどれくらいの量の鉄がとけるのか。どんな構造になっているのか。

(8)工場の人々はどのような働きをしているのか。危険な仕事をどのようにして行っているのか。危険を防ぐための設備はどうなっているのか。

1130 扶桑金属工場に見学をお願いする手紙を書いた。それから、きのう決めた調べることの中で、本で調べられるものはみんな每班毎に調べることになった。僕は、製鉄の原料の割合はどれくらいかを調べる班の班長になった。明日、一トンの鉄を作るのにどれだけの原料がどれだけの割合で必要なのかを調べようと話し合った。

121 班の調べをした。一トンの銑鉄を作るためには、三

・九五トンの原料が必要だとわかった。鉄鉱石が一・五五トン、古鉄が一トン、コークスが一トン、マンガンが〇・〇二五トン、石灰石が〇・四一トンである。鋼を作るための割合はわからなかった。鋼を作るためには銑鉄を作ったその上に古鉄を混ぜるといことはわかっていて、どれだけの古鉄が必要なのか。見学に行った時に調べることにしよう。

126 今日、報告会をした。「鉄の性質」の班が発表した。鋼鉄はかたいはがねのことだ。鉄はとかし方で柔らかくなったりかたくなったりする。熱して急にさますとかたい鉄になり、ゆっくりさますと柔らかい鉄になるとわかった。日本の鋼鉄は世界に名高いということである。

134 報告会の続きをした。最初に、僕の班が「製鉄原料の割合」について発表した。次に、「製品になるまでに通る機械」を調べた班が発表した。鉄管ができるまでに通っていく機械を写真で説明してくれた。流れ作業になっているのがよくわかった。速い生産で大量生産しているようだけれども、一つの鉄管は何分ぐらいでできるのかはよくわからない。早く見学に行つて調べたいと思った。

136 「釜の構造」を調べた班が発表した。釜には熔鉱炉と平炉があって、耐火レンガでできているそうだ。早

く確かめたいと思った。

136 「動力」の班が発表した。電力を使っているということだ。電力を起こすには水力と火力があつて、日本は水力発電が多い。火力発電には石炭が必要だとわかつた。

次に、「鉄のとかし方」を調べた班が発表した。熔鉱炉で鉄をとかすためには、空気圧搾機から空気を送つて、熱風炉で熱風にして、釜に送る。その熱風でコークスを燃やして、鉄鉱石とマンガンと石灰石などの原料をとかすのだとわかつた。鉄は一五〇〇度でとけるとわかつた。

1311 鉄と石炭の関係について勉強した。一番便利な製鉄所は、鉄鉱石と石炭のとれる所が近くて、港が近くて、電力が十分にある所である。石炭はコークスや燃料として製鉄に欠かせない大事なものだとなつた。

1314 今日扶桑金属工場を見学した。初めに、工場の食堂でおじさんの話を聞いた。この工場には平炉工場と製輪工場と製管工場がある。平炉工場は月産六千トンで人員は二八四人、製輪工場は月産千トンで人員百人、製管工場は月産一九〇〇トンで人員三二〇人だそうだ。この工場には七〇トンの平炉が三つしかないの
で月に六千トンしか鉄を作れないそうだ。働く時間は一日七時間ということだ。それから、できたパイプな

どはアメリカへ輸出していてトン当り十万円で作れると教えてくれた。次に、みんなでおじさんに質問して教えてもらった。鋼を作る原料は銑鉄と古鉄と石灰石などで、学校で調べたものと同じだった。銑鉄と古鉄の割合は一对二だと教えてくれた。古鉄は工場できたものを使うか問屋で買う。銑鉄は熔鉱炉のある八幡製鉄や富士製鉄から買う。石灰石は和歌山県有田郡山良から、石炭は北海道と九州から買うと教えてくれた。動力は電気が主だということだ。

休けいの後、おじさんの案内で工場の中を見学した。この工場は、ほとんど機械の力で作業している。平炉の側には十人ほどしかない。どの機械もよい仕掛けになっている。機械の力で大量生産しているのだと思つた。でも、これから段々と機械で仕事をするようになるのと人々の働きがいらなくなり、人々が余つてくるだろう。どうするのだろうか。工場の人々はみんな汗だくで働いている。鉄を作るのはたいへんなことだ。鉄はもっと有難く使わなければならないと思つた。工場の人々はマスクのようなものをして、メガネをかけて危険を防いでいる。外輪工場を出る時、掲示板に重傷者の名前が書いてあつた。こんなによい設備があるのに重傷者が出るのだろうか。だから、工場には安全第一と書かれたポスターがはつてあるのだと思

った。

1215

今日、見学で見つけた大量生産のできる理由を話し合った。何といつても機械の働きということが最初に出了。機械の力と動力は大切だと思った。それから、人間の働きということもたいへん大切だと話し合った。機械を發明したのは人間だし、動かすのも人間だからだ。働く人々は心を打ちこんで仕事をすべきだと思った。交通が発達して原料が一度にたくさん運べるようになったことも大切だと話し合った。最後に、安全第一ということが出た。人命を尊ばなければ生産量が少なくなるし、費用がかさんで損をする。工場はもっと危険を防いで、人命を大切にしなければならぬ、と話し合った。

1218

今日、「なぜ鉄の値段が高くなったのか、なぜ古鉄集めが盛んなのか」を話し合った。僕は、古鉄屋は古鉄を集めるともうけになるので集めているとばかり考えていた。でも、それだけではなかった。古鉄は鉄の原料として必要なものだった。古鉄集めは日本にとってなくてはならないものだった。実際、日本は鉄鉱石の足りないのを古鉄で補っているの、古鉄を集めなければならぬのだと考えた。でも、盗んでまで集めるのはよくないと話し合った。鉄の値段が高くなったのは、世界の軍備のために国際的に値が上がっているた

めだと話し合った。それに、電気代などの生産費が高くなっているためだと話し合った。

今、軍備のために鉄を使っているということはたいへんなことだ。鉄は国民の生活を幸福にするために使わなければならない。国の復興のために使われてもよい。でも、戦争のために使うと不幸になる。鉄は平和のために使って、もっと鉄の貿易を盛んにしなければならぬと話し合った。

三、単元「鉄と日本」の構成原理

ここでは、本単元の構成原理を吹上小の教育観より明らかにしたい。

(1) 歴史的社会的課題の認識

次頁の表は単元「鉄と日本」の展開の概略を示したものである。本単元は、児童の日常の経験的事態から生じた「なぜ鉄の値段が高くなったのか、なぜ古鉄集めが盛んなのか」という問題を解決する学習を行うことによって、「鉄資源の窮乏」という日本の歴史的社会的課題を認識し、「国際平和の下で貿易を盛んにしなければならない」という課題解決の子どもなりの展望を行うように展開されているといえよう。つまり、本単元は、日常生活の中から生じた児童の疑問としての

表1 単元「鉄と日本」の展開の概略

問題解決過程	具体的活動と内容
<p>経験的事態 ↓ 問題設定 ↓ 仮説(予想) ↓ 予見 ↓ 情報収集(班学習) ↓ 情報交換(報告会) ↓ 帰結構成</p>	<p>近頃、鉄や金物類の値段が上がってきた、古鉄屋さんが多くなってきたと感じ、疑問を抱いている。 「なぜ鉄の値段が高くなったのか、なぜ古鉄集めが盛んなのか、をこれからみんなで学習していくことになった。 「日本に段々鉄が減ってきたらどう、鉄の値段が上がったので古鉄を買うともうけになるのだろうか、朝鮮の戦争に関係があるのだろうか、と想像しながら話し合った。 古鉄で何を作るのか、鉄の生産費、日本に今鉄の原料が多いのか少ないのか等を調べればわかると見通しをつけた。 城野君の班は「日本に今鉄の原料が多いのか少ないのか、を調べた。その結果、「日本には鉄の原料が少ないこと、必要なだけの鉄の原料がないので古鉄を集めているということ。などがわかった。 古鉄で何を作るのかを調べた班が「古鉄は鉄を作るための大切な原料であること、鉄の生産費の班が「鉄の生産費が上がったので値段が上がったこと、日本の鉄の生産費が外国より高いこと、を報告した。本単元の問題についての帰結を六項目にまとめた。(1)日本に鉄の原料が少ない、(2)鉄の原料の輸入が難しい、等。</p>
<p>問題設定 ↓ 経験の意味の拡大 ↓ 情報収集と情報交換 ↓ 工場見学 ↓ 帰結構成</p>	<p>帰結を検証するために「扶桑金属工場を見学して、鉄がどのように作られているのかを確かめる。ことになった。 工業の発達の学習をして、蒸気機関の発明によって大量生産ができるようになったことがわかった。「大量生産がどのように行われているのか、を工場見学で見てくることになった。 工場見学の事前調査として、各班で「釜の構造、や「鉄の性質、などを調べて報告し合った。城野君の班は「1トンの鉄を作るのに必要な原料の量と割合、を調べて発表した。 工場のおじさんから鉄の作り方や生産量などを聞いた後で、実際の鉄製品の生産過程を見学した。 大量生産は機械の力で行われていること、工場の人の働きや交通の発達なども大量生産に欠かせないものであることがまとめられた。</p>
<p>結論構成</p>	<p>「古鉄集めが盛んになったのは、古鉄が製鉄に不可欠の原料で、日本は鉄鉱石の足りないのを古鉄で補っているからである。鉄の値段が上がったのは、世界の軍備のために国際的に値段が上がっているためであり、生産費が上がったためである。」とまとめられた。</p>

問題を解決することによって、歴史的社会的課題を認識する問題解決学習になっているのである。本単元の目標は「国際的視野に立って、鉄工業を通じて、工業資源の乏しいわが国の現実の姿を理解し、生産復興の意欲を昂める。」である。教師の側から見れば、本単元は、教師が「鉄資源の窮乏と国際平和の必要性」という歴史的社会的課題を児童に認識させるために、それに連なった日常の経験的事態を問題化して組織した問題解決学習であるといえよう。本単元の目標は歴史的社会的課題の認識であり、それを認識することが問題の解決なのである。

吹上小は「封建性、貧困性、非合理性などの歴史的

現実面に横たわる困難な社会的課題を解決すること」(傍点
は引用者)を、本単元の実践の行われた昭和二六年以降教育
目標として掲げている。これはいうまでもなく当時のコア・
カリキュラム連盟の教育論の影響を受けたものである。とこ
ろで、この教育目標では「課題の解決」となっているが、実
際に単元でめざされているのは、先述のように「課題の認識」
である。歴史的社会的課題の解決は大人にとっても難しいも
のであり、児童にとつては不可能といつてよい。吹上小は歴
史的社会的課題解決のための前提として、児童が課題を認識
していくことに問題解決学習の教育的意義を見出ししていた
と考えられるのである。

日本の歴史的社会的課題に立脚した実践の典型例といわれ
る「西陣織」や「水害と市政」等の実践も、やはり児童の生
活から生じた問題を解決することによって歴史的社会的課題
を認識していく問題解決学習になっている。この両実践を分
析された二杉孝司氏は、「必要なことは問題を認識すること
ではないのか」「問題解決の過程に存在している問題の認識
過程こそ、問題解決学習のもつていた積極的な意義なのであ
る。」と述べている。二杉氏は課題(二杉氏は問題を歴史的社
会的課題の意で用いている)の認識とその認識過程に問題解
決学習の意義を見出ししていると考えられる。

単元「鉄と日本」の場合、課題を認識すること以上に、そ
の認識過程に教育的意義が見出されている。そこで、次に本

単元の課題認識過程、すなわち問題解決過程について考察す
る。

(2) 経験の連続的発展的再構成

単元「鉄と日本」は、児童が最初に設定した「なぜ鉄の値
段が高くなったのか、なぜ古鉄集めが盛んなのか」という問
題を一貫して探究していく問題解決学習である。ところで、
前頁の表にあるように、本単元では、問題設定→仮説→
情報収集→情報交換→帰結という問題解決過程が二回繰
り返され、結論が導かれている。(さらに三学期には、この結
論より導かれた、製鉄原料の貿易を盛んにするにはどうすれ
ばよいか」という問題を探究する学習が行われている。)

ここで注目すべきは、第一に、問題解決過程が連続的に繰
り返される中で、児童の学習対象が、日常的な地域の問題か
ら日本及び世界の問題へと発展的に変化していることであ
る。つまり、本単元は、児童の経験が直接経験によるものか
ら間接経験によるものへと質的に高まっていくように構成さ
れているといえよう。第二に、第一次経験組織の過程で導か
れた帰結が第二次経験組織の過程で検証されるように展開さ
れている点が注目される。本単元では、経験的事態を常に
「不確定事態」と見なし、「より多くの確実性を求めて思考」
し、経験の再構成を行っていく学習が展開されているといえ
よう。

「能動的、思考的、社会的経験が次から次へと拡大的に発展し、学習者自身が自分の経験を正しく組織だてるようにすること、いいかえれば望ましい方向に経験の再構成を行うこと」を、戦後の吹上小は一貫して教育目標としている。この目標はいうまでもなくデュイイの経験主義教育論によるものである。本単元はこの目標にもとづいて、問題解決が連続的発展的に展開されていると考えられるのである。

(3) 正しい社会を建設する人間主体の育成

吹上小は「正しい社会を建設する人間主体の育成、すなわち、環境に対して能動的主体的に働きかけ、近代社会としての市民社会への適応能力をもち、さらに困難を克服して社会の矛盾を打ち破り、現在社会を改造しようとする改革的人間の育成」を戦後一貫してめざし、それを理想的人間像として教育実践に取り組んでいる。この理想的人間像は、吹上小の理論的指導者である森昭氏の教育論より導かれたものである。森氏は「今日の教育は…(中略)…歴史的な現在にたつて、過去の生活現実を民主的な仕方でも改造する人間、将来にむかって、豊かで文化的な、自由と正義の、平和な民主主義社会を建設する人間にまで、青少年を指導し、形成しなければならぬのである」と述べている。

この理想的人間像は、民主主義社会を建設するための個人のあり方を示した全人格的な態度目標である。先述した、(1)

歴史的社会的課題の認識と、(2)経験の連続的発展的再構成という二つの目標が達成されてはじめて達成される教育の窮極目標である。

吹上小は問題解決学習による歴史的社会的課題の認識そのものよりも、その認識と認識過程を通して、経験を連続的発展的に再構成する能力と、環境に対して能動的主体的に働きかけ民主主義社会を建設しようとする態度を育成することを本旨としていると考えられるのである。そのため吹上小では、児童に認識させるべき課題は系統的にとらえられていない。以上のように、単元「鉄と日本」は態度、能力、課題認識の三つの教育目標より構成され、その達成がめざされているのである。

四、問題解決学習における知識の主体的組織

(1) 問題解決の道具としての知識

吹上小は、「知識の体系は児童が彼の問題にたち向い、彼自身の経験を解釈し組織するのを助ける手段としての価値は認めるが、目的とするものではない。目的はどこまでも児童の生活の更新になくはならない」と述べている。吹上小は、三、で述べた三つの目標を問題解決学習で達成すべく、知識の習得をその道具として位置づけているのである。そこで、吹上小は問題解決の道具としての知識を次の三つに分類して

把握している。

。知的素材（既有経験としての知識）

。予見か帰結を見出すのに必要な各種の情報と吟味・判断するのに必要な素材（報道的知識）

。帰結を得、更に帰結から実証へ、そして結論への過程には、より高次の経験の増加へと判断し、思考を重ねるにはより合理的科学的に総合され、組織だてられた知識素材（科学的知識）が考えられる。²⁰⁾

問題解決の道具としての知識を、既有経験としての知識（記憶）、報道的知識（情報）、科学的知識の三つに分類して把握し、科学的知識までも問題解決の道具として位置づけ、重視するところに吹上小の特色があるといえよう。

ところで、このような考え方は、吹上小が森昭氏の教育論に学んだものである。森氏は、「ほんとうの学習は、既知の知識を手段（道具）にして、さらに新しい知識を実験的に探求していく、目的追求的な活動である。」²¹⁾「知識は究極においては、行動的な思考の用に従属するものである」ということが、デュウイのプラグマティカルな確信である。²²⁾と述べている。森氏のこのような考え方は、問題解決学習における知識の位置づけをめぐる広岡亮蔵氏との論争²³⁾の中でより明確にされたものである。船山謙次氏は森・広岡論争を分析され、次のように述べている。森・広岡両氏の「喰いちがいは、具体的には『一般的知識の組織（吹上小のいう報道的知識と科学的

知識を含む……引用者）をどうみるかにかかっている。森氏が『一般的知識の組織』を尊重するのは、あくまでも「探究」の『手段』としてであり、知識は『子どもの生活においてあるもの』と考えているといつてよい。数千年にわたって人類が蓄積してきた知識・科学の体系（デュウイのいわゆる『先行的実在』）を重視するといつても、それは「探究」の『手段』とみられる。それゆえに森氏にあっては、『系統的知識』はややもすれば「探究」の中に解消されてしまうおもむきがある。²⁴⁾

このように森氏は、「知識の対象的組織」²⁵⁾（学習者が学習しはじめる以前に、だれか——たとえば学者や教師——が、すでにつくりあげている知識の組織、すなわち一般的知識の組織）を、問題解決学習の探究的思考の道具として位置づけ、児童が「知識の主体的組織」（学習者自身が自分の経験を組織立てたものとしての知識の組織）を形成していくことを問題解決学習において重視するのである。

吹上小の単元「鉄と日本」の実践は、この考え方にもとづいて行われている。以下では、単元「鉄と日本」において、児童が形成した「知識の主体的組織」²⁶⁾について、「知識の対象的組織」の習得と関連させつつ考察する。

(2) 単元「鉄と日本」における知識の主体的組織

次頁の表は、単元「鉄と日本」の学習の中で、児童が「知識

表2 単元「鉄と日本」における児童の思考の推移 ※ () 内は日を示している

問題	建設からの子見 —— 情報収集・情報交換過程における推論 —— (7年-9%)	学級全体の帰結 —— 第一歩建設過程の過程(%)	帰結からの推論 (%)	工場見学後の結論 (%)
<p>なぜ古鉄の値段が安く買ったのか。</p>	<p>建設からの子見 (7年-9%)</p> <p>古鉄の値段が安く買ったのは、日本に段々古鉄が集まってきたからだろう。(7年)</p> <p>今は古鉄を買いに来た。安いので売ろうになったのだから。(7年)</p> <p>古鉄屋が多くなったから、古鉄の値段が上がったので、古鉄を買おうとしないからだろう。(7年)</p>	<p>(1)日本に鉄の原料が少ない。 (2)鉄の原料の輸入が難しい。 (3)復興のため日本で鉄が必要である。</p> <p>(教師の補足説明：科学的知識) 生産が少なくて買い手が多いと値段が上がる。反対に生産が多くて買い手が少ないと値段が下がる。</p>	<p>日本では鉄の原料が少なく、輸入も難しいのだから安く鉄が必要だから鉄の値段が上がる。</p>	<p>古鉄屋は古鉄を集めるともうけに売るので売っているのだよ。でも、古鉄は鉄の原料として必要なので、古鉄集めは日本にとってなくてはならないものだ。実際、日本に古鉄で補うためには売らないのだ。</p>
<p>古鉄屋が多くなったから、古鉄の値段が上がったので、古鉄を買おうとしないからだろう。(7年)</p>	<p>古鉄の値段が高くなったのは、古鉄の量が減っているのだから。(7年)</p> <p>古鉄が全部鉄になるから鉄鉱石より得になる。得になるのなら、古鉄屋が多くなった理由がわかる。(7年)</p> <p>古鉄の製造の学習より：他班の発表) 古鉄は鉄を作るための大切な原料である。古鉄は本当に大切なものなので、古鉄屋が多くなった。(7年)</p> <p>古鉄の生産費の学習より：他班の発表) 鉄の値段が高くなったのは、生産費が高くなったからだ。(7年)</p> <p>日本の鉄の生産量は外国より高いので、鉄の値段が高い。(7年)</p>	<p>(4)日本の鉄の生産費が他の国よりも高い。 (5)国際的にも鉄の値段が上がっている。 (6)世界の国々が軍備のために鉄を買い集めている。 (欠落している)</p>	<p>古鉄の原料をこれからも外国から買うと、段々鉄の値段が上がって来るだろう。</p>	<p>電気代などをとの生産費が高くなったので、鉄の値段が高くなった。</p> <p>鉄の値段が高くなったのは、世界の軍備のために国際的に値が上がっているためである。</p>
<p>鉄の値段が高くなり、古鉄屋が多くなったのは、朝鮮の戦争に関係があるのだろうか。(7年)</p>	<p>その他の学習より) 今、世界が二つに分かれようとして、鉄で何かを作ろうとしているので、どこでも鉄の値段が高くなっている。(7年)</p> <p>鉄の値段が上がった理由は、朝鮮の戦争に関係があるだろう。今、アメリカに頼まれて、朝鮮の戦争で使ういろいろな軍用品を作っている。(7年)</p>			

の对象的組織」を取り入れながら、「なぜ鉄の値段が高くなつたのか、なぜ古鉄集めが盛んなのか」(以下では本単元の問題と記す)について思考する中で形成した「知識の主體的組織」の推移を示している。児童は本単元の問題を実に積極的に探究している。記憶としての知識を想起し、情報を収集交換し、科学的知識をも活用して思考を繰り返している。たとえば、新聞の鉄盗難の記事を想起して「古鉄を買いに来てもないので盗むのだろう」と考えたり、日本の鉄鉱石の生産量・輸入量・使用量についてのデータをもとに「日本に鉄が少ないので鉄の値段が上がリ、古鉄集めが盛んになっているのだろう」と推理したりしている。また、「生産が少なくても買い手が多いと値段が上がる」という教師の需要供給法則についての説明を手がかりにして、「日本では鉄の原料が少なく輸入も難しいのに、鉄を復興のためにたくさん使い、鉄が不足するから鉄の値段が高くなっているのだ」と推論している。この推論は需要供給法則を道具として形成された科学的にレベルの高い「知識の主體的組織」といえよう。このように児童はひとつひとつの情報を得る毎に、既知の知識と照合しながら思考し、より確実性の高い仮設的知識を形成している。つまり、児童は「知識の对象的組織」を連統的に取り入れる中で、「知識の主體的組織」を繰り返して形成し、それをより科学的な方向へ高めているのである。

ここで、本単元の第一次経験組織の過程の帰結に着目した

い。本単元の問題を探究して児童が導いた帰結は、(1)日本に鉄の原料が少ない、(2)鉄の原料の輸入が難しい等の六項目で、箇条書きの形で並記されている。(これらの帰結が日本の歴史的社会的課題の認識につながるものであることは先述した。)ところで、これら六項目の帰結には、児童が情報収集・交換過程で組織した「古鉄は製鉄のための不可欠な資源である」という知識と、「アメリカに頼まれて朝鮮の戦争で使ういろいろな軍需品を作っているために、鉄の値段が上がっている」という知識が欠落している。(表参照)児童が探究の結果として構成した帰結は不十分なものになっているといえよう。

さらに、児童は六項目の帰結を有機的に結びつけて「帰結からの推論」を構成している。(1) (3)の帰結と需要供給法則を結びつけて「日本では鉄の原料が少なく輸入も難しいのに、鉄を復興のためにたくさん使い、鉄が不足するから、鉄の値段が高くなっているのだ」と推論し、(5) (6)の帰結を結びつけて「鉄の原料を他の国から買うと、鉄の値段が段々と高くなってくるだろう」と推論している。しかし、導かれた帰結が不十分であるため、帰結からの推論において、「復興による需要と朝鮮の戦争による軍需、及び日本の鉄原料の少なさと輸入の難しさ等によって、日本の鉄の需給バランスが崩れ、鉄が値上がりし、古鉄集めが盛んになっている。古鉄は製鉄の不可欠の原料であり、今はそれを売るともうかるので

盛んに集められている」という本単元の問題の総括的な結論に、児童は到達していない。工場見学後の本単元のまとめの段階においても、それは同様である。

本単元の指導者である雑賀明先生が書かれた学習指導計画には、児童に到達させたい帰結として、「鉄は復興のためにも使われているが、朝鮮の戦争の軍需として多量に使用されている」²⁷、製鋼のために古鉄は不可欠の重要資源である²⁸等が箇条書きの形で並記されている。児童が探究の結果として導いた六項目の帰結もその中に含まれている。したがって、雑賀先生は本単元の問題の帰結を欠落するところなく把握しているといえよう。しかし、実際の授業の中で、児童が探究の結果として導いた帰結の欠落部分を補い、教師がとらえた帰結を児童に教えることは試みられていない。また、教師が児童に到達させるべきものとして設定した帰結は、教師の頭の中に構築された本単元の総括的な結論から導かれるものである。この結論は本単元の目標（単元の中心命題）として学習指導計画に示されるべきものであるが、示されていない。雑賀先生は自らが構築した本単元の問題の結論そのものを児童が導くこと及びそれを教えこむことを意図していない、と考えられるのである。

教師が構成した帰結や結論を児童に直接に教えようとしたのは、それが目的としての知識だからである。先述のように、吹上小は、知識の習得を問題解決の道具として位置づけ

ている。「既得の知識を手段——作業仮説——として、今まで誰もかもっていないなかったことを発見すること、これが本単元の学習である。したがって、科学における学習は、そこに到達すべき目的物として知識の体系を前にしているのではなくて、逆にさらに新しい知識の実験的探求を目的とする活動なのである²⁹」という認識が吹上小では貫かれている。児童に帰結や結論を教えることは実験的探究の精神に反する。したがって、単元「鉄と日本」において、児童が所定の帰結や結論を目的として探究するという授業構成は行われていないのである。

問題解決学習では、児童が新しい知識を主体的に探究すること、「知識の主体的組織」が重要視され、単元の到達目標としての知識は明示されないことが多い。もちろん、すべての児童を所定の知識目標に到達させるための指導は否定される。児童が自力で探究して形成した知識の組織、及びその探究過程が尊重されるのである。したがって、児童の探究力が低ければ（当然、大人の探究力より数段低い）、児童が形成する「知識の主体的組織」は欠落部分の多い事実的羅列的な低次のレベルのものにとどまり、単元の問題の真の解決、すなわち総括的な結論の構成には至らないのである。単元「鉄と日本」の学習日記は、初期社会科における問題解決学習のこのような限界性を明らかにしているといえよう。

五、科学的な知識の主體的組織の形成

以上のように、吹上小では、問題解決過程を数回、連続的・発展的に繰り返す中で、児童が「直接経験をこえた環境に対してまで意味の付与をなし、探究していく問題解決学習」が実践されていた。吹上小の問題解決学習の窮極的な目標は「正しい社会を建設する人間主体の育成」であり、社会認識形成よりも市民的資質の育成に重点がおかれていたといえよう。また、「知識の主體的組織」と組織過程（探究過程）が重視され、「知識の對象的組織」は問題解決の道具としてのみ尊重されていた。単元の到達目標として設定された知識命題に向かつて児童を導いていく学習は否定されていた。問題解決を進める中で、児童が主體的に実験的に探究し、新しい知識を組織していくことが重視されていた。そのような学習をすることによってこそ、児童の社会的な主体性が育成されると考えられていたのである。そのため、児童が主體的に形成した知識の組織は結論として科学的に低次なレベルにとどまっていたのである。

ところで、教師が単元の到達目標として設定した知識命題（系統的知識）を児童が習得する学習と、探究的な問題解決活動によって社会的主体性を育成する学習とは相容れないのであろうか。このテーマは問題解決学習と系統学習の統一を

めぐる論争の本質でもある。この点について宇佐美寛氏は次のように述べている。「問題解決とは生徒の思考についていわれるべきことである。つまり、生徒が記号を解釈した解釈性向が問題解決的かどうかが問われるべきなのである。これに対し系統とは教科や教材のような、まだ伝達されていないシンボルの意味の連関のことであり、その解釈性向のことでない。だから問題解決と系統とはカテゴリーを異にするのであって、論理的には、この二つのものの各々を尊重することが対立するはずはないのである。」宇佐美氏の所論にしたがえば、社会科学習における問題解決と系統、すなわち社会的主体の育成と科学的な社会認識の形成とは両立するといえよう。

単元「鉄と日本」の場合、児童は主體的に探究的思考活動を行い、問題解決を繰り返している。「子どもをとりまく環境に生じる変化」や「主体の主観に生じる環境に対する意味の附与の変化」によって生じた不確定事態を問題として受けとめ、それを解決すべく探究的思考を繰り返している。児童の思考は問題解決的になっていくといえよう。このような児童の探究能力と探究的な態度は、吹上小の教育目標である「経験を連続的に再構成する能力」と「正しい民主主義社会を建設しようとする態度」の育成につながるものである。そして、このような能力と態度を、吹上小の児童はそれまでの問題解決学習の積み重ねの成果として達成していると

いえよう。

他方、本単元の知識の系統性は極めてあいまいである。本単元のような知的問題解決学習⁽³⁾において、教師が目標として設定すべき知識は、単元の問題をより科学的に説明しうる知識命題である。教師はそれにもとづいて教材構成を行い、情報として提示する知識やデータを選定する。単元「鉄と日本」で教師が児童に提示している「知識の対象的組織」は、需要供給法則等の科学的知識をも含めて、すべてこの教材としての知識である。教材としての知識は、目標としての知識（教育内容）より導かれるものである。単元「鉄と日本」では、目標としての知識は明示されていないが、教師は頭の中にあるそれをもとに、教材としての知識を選定し、単元を構成しているのである。

反対に、児童は記憶としての知識や、教師から提示された情報や科学的知識を問題解決の道具として「知識の主體的組織」を形成していく。単元「鉄と日本」の場合、児童は数多くの「知識の対象的組織」を取り入れる中で「知識の主體的組織」を形成し、いくつかの帰結を構成し、帰結を構造づけることよって本単元の問題の総括的な結論を推論している。しかし、探究力が不足していたために、その推論は結論として科学的に低次のレベルにとどまっていたのである。教師は、児童が形成した新しい「知識の主體的組織」とさらなる実験的探究とを尊重するために、単元の目標としての知

識命題（本単元の問題の結論）を児童に提示することを避けていたのである。ところで、教師が単元の目標として設定す

る知識は、客観的科学的な知識体系にもとづいた、単元の問題をより科学的に説明しうる知識命題である。それは、教師の実験的探究の所産であり、教師が形成した「知識の主體的組織」なのである。決して絶対的なものではない。仮設的な知識なのである。したがって、教師が、問題解決学習の結論構成の時点で、単元の目標としての知識命題を吟味可能な形で提示して、児童の推論の誤りを正し、不足部分を補い、児童の推論をより科学的なものにすることは、決して児童の実験的探究、問題解決的思考を損なうものではないといえよう。忌むべきは目標としての知識を絶対的なものとしての注入である。教師は、問題解決のための環境設定や情報提供のみにとどまらず、知識目標を児童に理解させ、そこからさらに実験的探究を導く指導者として寄与すべきであるといえよう。教師が児童に提示する問題解決学習の結論が仮設的なものであることを認識できず、結論の提示を避けたことが、初期社会科教育実践をはい回るものにしたといえよう。

初期社会科教育は、経験の連続的発展的再構成によって育成される社会的主体性を尊重した。児童が自らの「知識の主體的組織」を形成し、それを更新していくことを重視した。そのために、教師は問題解決の道具としての知識を積極的に提示したが、目標としての知識を提示することは児童の主体

的な探究を阻むものとして避けられた。その結果、児童が形成する「知識の主體的組織」は科学的に低次なレベルの不分かつ断片的なものにとどまり、単元の問題の総括的構造的な結論には至らなかった。本稿で取り上げた単元学習日記は初期社会科学のこのような問題を明らかにしていたといえよう。しかし、教師が目標として提示する知識の仮設性が認識されるとき、「知識の主體的組織」の科学性をも向上させる社会科学習が可能になると考えられるのである。

註(1) 戦後の初期社会科学教育の時期範囲については、昭和三〇年の社会科学習指導要領改訂までとするのが一般的と考えられる。

(2) 文部省『小学校学習指導要領社会科学編(試案)』一九五一、二頁。

(3) デューイ(松野安勇訳)『民主主義と教育(上)』岩波書店、一九七五、一三二頁。

(4) 森昭『知識の組織』とカリキュラムの構造』(『63教室』一九五一年一月号)を参照。

(5) 吹上小学校のコア・カリキュラムについては、拙稿「戦後初期社会科学教育実践史研究——吹上小学校コア・カリキュラムと内原小学校地域教育計画の検討——(日本社会科学教育研究会)『社会科学研究』第三号、一九八三)を、吹上小学校の初期社会科学教育実践の変遷過程については、拙稿「戦後初期社会科学教育実践史研究——昭和二五—三〇年の吹上小学校の教育実践——」(中国四国教育学会『教育学研究紀要』第二八卷、一九八三)を参照されたい。

(6) 本稿には単元学習日記の要点を抽出して掲載した。また、字句の誤り等の修正も若干行っている。

(7) 単元「鉄と日本」の学習指導計画、ガリ版刷り。

(8) 吹上小学校『吹上教育第八集——実践による問題解決学習の本質の追求——』一九五二、一二頁。

(9) コア・カリキュラム連盟は、昭和二六年八月、三層四領域カリキュラムと日本の歴史的社会的課題に立脚した問題解決学習を行うことを確認している。また、社会改革に対応する目標として、(イ)生産の高度化と経済自立、(ロ)前近代性の払拭による民主主義の確立、(ハ)平和愛好と国際協調、(ニ)窮乏よりの解放と生活水準の向上を設定している。(『カリキュラム』臨時増刊「生活教育の前進第二集——生活教育の構造と運営——』一九五二)。

(10) 京都市日影小学校の永田時雄先生が昭和二八年に五年生を対象として行われた実践。『カリキュラム』一九五四年二月号に所収されている。

(11) 熊本大学附属中学校の吉田定俊先生が昭和二八年に三年生を対象として行われた実践。『カリキュラム』一九五三年二月号に所収されている。

(12) 二杉孝司「問題解決学習と系統学習」(柴田義松・東京大学教育学部教育内容研究室編『教科理論の探究——戦後教科研究の展開——』一九八〇、九頁)。

(13) 同右、一〇頁。

(14) 吹上小学校雑誌賀明先生の証言による。

(15) 森昭「経験の『ひととま』と学習指導」(『カリキュラム』

一九五一年三月号、八〇頁。

(16) 吹上小学校、前掲書、九頁。

(17) 同右、三、四頁。

(18) 森昭『今日の教育原理』、黎明書房、一九五〇、四二頁。

(19) 吹上小学校『吹上教育第二集——本校プランの理論——』一九四九、一五頁。

(20) 吹上小学校、前掲書(8)、五六、五七頁。

(21) 森昭、広岡亮蔵『ダイアログ生活学習の省察』黎明書房、一九五〇、七七頁。

(22) 同右、八四頁。

(23) 森昭「経験による学習の指導」(『カリキュラム』一九五一年二月号、五月号)、広岡亮蔵「森昭氏『問題解決学習』への批判」(『カリキュラム』一九五一年六月号)、森昭「経験主義の弁護と批判」(『カリキュラム』一九五一年九月号)を参照されたい。

(24) 船山謙次『統戦後日本教育論争史』、東洋館出版社、一九六〇、三四三頁。

(25) 森昭、前掲書(4)を参照。

(26) 経験主義の認識論の検討にもとづいて社会科学問題解決学習の授業理論と実践を分析されたものとして、池野範男「社会科学授業理論の認識論的基礎づけ(Ⅱ)——『子どもの思考を育てる社会科』の場合——」(『日本教科教育学会誌』第八卷第一号、一九八三)がある。筆者も単元学習日記の分析にあたり参考にさせていただいた。

(27) ガリ版刷りの学習指導計画が残存しているが、紙幅の都合に

より省略する。

(28) 森昭、前掲書(18)、一五〇頁。

(29) 吹上小学校、前掲書(8)、四二頁。

(30) 宇佐美寛『思考・記号・意味』誠信書房、一九六八、一三四～一三五頁。

(31) 吹上小学校、前掲書(8)、三六頁。

(32) 知的問題解決学習については、森昭、前掲書(18)、二二一～二二七頁を参照。

(付記)

本稿作成にあたって、元吹上小学校教諭である雑賀明先生、玉井廉先生、湯川馨先生他多くの先生方に貴重な資料を拝借させていただくとともに、御助言を賜りました。末尾ながら、心より御礼申し上げます。

(広島大学大学院教育学研究科)

A Study of Personal Organization of Knowledge by a Pupil in Problem Solving Method

by Hirakazu Kimura

The purpose of this paper is to argue a characteristic of personal organization of knowledge by a pupil in problem solving method in social studies education practice in the early era after World War II. In this paper, I have analyzed a learning-diary written by a pupil who studied a unit "Iron in Japan" practiced at Fukiage Elementary School, Wakayama city, in 1951.

The result of the analysis is as follows:

The pupil could not complete his personal organization of knowledge in solving the problem of the unit well. Because the teacher believed that;

- 1) All teachers can do is to provide pupil with the motivation for study and the way of learning.
- 2) According to the theory of knowledge in pragmatism, teachers can only give necessary informations for solving the problem.
- 3) Once teachers show the knowledge as the learning objective, it discourages pupils to inquire the problem further.